令和６年度　事業報告書

特定非営利活動法人　こども応援ネットワーク

●そだつ事業部

1.　都筑区子育て支援センターPopola

① 子育てひろば

・年間延べ利用児数はポポラ 11,219 人（対前年比 92.5%）、サテライトは 15,308 人（対前年比 87.3%）となっています。2024 年 4 月より、横浜市の DX 戦略に合わせて「横浜市地域子育て支援拠点サイト」が稼働し、7 月には「横浜市子育て応援アプリ パマトコ」も始まり、入館システムやイベント申込み等がシステム化されました。システム変更に伴い、拠点の利用者やスタッフは混乱することも多く、また集計の前年比が正確に取れなくなってしまったこともありますが、DX の良さを活かして利便性の向上などにつとめていきたいと思っています。

・ 0、1 歳児の利用がポポラ 65%、サテライト 69%となっており、全体の約 7 割を占めている中で、ポポラは、２歳以上の割合が昨年度と比較して 4%増加しました。２～３歳児向けイベントの内容をニーズに合わせて変更したり、イベント数を増やしたりすることで利用の増加につながったと考えています。
・ 年間総利用者数は、ポポラ 22,451 人、サテライト 30,569 人。1 日の平均利用者数は、ポポラ 92 人、サテライト 126 人となっています。
・ ポポラは、子育てサポートシステムのひろば預かりが増え、提供会員と子の利用が増加しています。また、土曜日は特に父と子のみの利用が多いのが特徴です。
サテライトは、両親が買い物中に祖父母と孫が利用するなど、親子以外の利用も多く、3 人以上のきょうだい児の利用も多くみられます。

・ ひろばでは自分らしい子育てができるように、引き続き「多様性のある環境づくり」に取組んでいます。多胎児支援では、多胎児妊娠中のプレママの参加もあり、先輩ママと対話できる場になりました。また、生活介護事業所のパン販売では、拠点利用者のみならず、パン購入のためにわざわざ来所する方や、同じ商業施設内の多店舗スタッフの利用もあり、多様な人が拠点に訪れるきっかけにもなっています。

・ チルコロギャラリーとして、NPO 法人 SCC さんと共催で多文化交流のイベント企画もおこないました。英語とやさしい日本語を使って、ラトビアの「フォークダンスを踊ろう！」やナイジェリアの「ラッパー（巻き布）の使い方講座」など、様々な文化や風習などがある中で、参加者がお互いを知るきっかけの場にもなっています。
・ 昨年サテライトで開催した「都筑カメラ日和」は、今回はセンター北/あいたい 3 階のイ

ベントスペースを借りて開催しました。拠点にはなかなかつながらない年齢層の方等、より多くの方の目に留まり、展示を通して多様な方と接点を持つ機会となりました。

・ サテライトでは、近隣で活動している障がいのある方の作品展「ココロはずむアート展」の展示もおこないました。今年度は、出展団体/15 事業所のスタッフが展示作業をおこない、作品ができた経緯や作家さん自身のことなどに興味を広げながら、2 ヶ月の展示期間を迎えることができました。作者や、作者のご家族、そのヘルパーさんなど、今まで拠点につながりのなかった方の来所が 100 名近くあり、作品のファンになったお子さんもいて、普段の生活の場ではなかなか接点のない方達同士が触れ合える機会となりました。

・ シニアボランティアや、学生ボランティアと親子の交流イベントも開催。多世代との交流をはかる場を設けました。また、父親の育児参加促進事業として、当事者パパがおしゃべりする場「Popolaパパプロジェクト」や「男性育休講座」等、多様な家族の形に合わせて気軽に集える場を設けました。

・ 今年度、ポポラのひろば・情報サロンは大幅な改修工事をおこないました。これまで長方形だったひろばの形をＬ字型にし、コミュニティルームに靴を履き替えて入っていた導線をつなげたことで、ひろばとコミュニティルームの往来がしやすくなり、スペースの有効活用に繋がっています。それに伴い、年齢に応じた居場所づくりも工夫ができ、「元気っ子の日」や「のりものの日」など年齢に合わせたイベントも開催しています。

・ サテライトのひろばでは、乳がん啓発イベントを実施。自身の健診に行く時間の取れない子育て世代が健康に興味を持つきっかけとなるよう、乳房模型をひろばに設置しました（10 日間）。

・ 当事者主体の興味のあることについての対話やイベント開催をする「じぶん企画」では、自分自身、趣味の事、子どもの事、父親同士の繋がりなど様々な企画が発案されました。また、「赤ちゃんとの生活お世話体験」に参加していたプレパパが、産後先輩パパとして活躍。支援をされるばかりではなく、自身の体験を次の世代の人に伝える等、利用者の循環が生まれています。

・ 引続き、妊娠期からの切れ目のない支援にも取組んでいます。ポポラとサテライトでの土曜両親教室に加え、地域ケアプラザでの休日両親教室の開催によって、自分の住んでいる地域での参加が可能となりました。ミルク作り体験では、「ミルクの軽量」や「温度調整」など、とても真面目に取り組むご夫婦の姿があります。出産に向けての不安解消はもちろんですが、相談できる場があることや、気軽に相談できる人が地域にいることを知ってもらえる機会にもなっています。

② 子育て相談

・ 専門相談については、昨年度と比較して「主な相談の割合」に大きな変化はありませんでした。相談児の年齢は０～１歳が６割を占め、０～２歳までが約８割を占めています。
・ ひろば相談でも、相談傾向に大きな変化はありませんでしたが、「子の生活・健康」に関する相談も増加しています。また、妊娠期の方や外国につながりをもつ子の養育者からの相談も増加しました。相談者（日本人）と配偶者（外国の方）の宗教の違いや今後の日本での生活についての不安、幼稚園入園について、システムが複雑、情報が届かないなどの声がきかれています。

③ 子育て情報の提供

・ 今年度は、2 年に 1 度の「チルコロ MAP」の改訂の年でした。「つづきの一押しスポット」やママ・パパたちのロコミによる「スイーツ＆パン特集」など、より地域に密着した情報更新となっています。
・ ロコミ情報ファイルの作成は、養育者やボランティアと共に、情報を収集・提供する仕組みづくりとして継続しています。地域で子育て支援をしている方からの情報も加えながら更新を続けています。
・ 昨年から設置している「やってみたいつながりたいボード」は、引き続き利用者のやってみたいを応援する「じぶん企画」として活用中です。子育て当事者の「やってみたい」「聞いてみたいこと」などをボード上で質問することで、養育者同士の情報収集や発信のきっかけづくりとなっています。

・ 情報コーナーも改修工事により大幅なレイアウト変更をおこないました。チラシの配架は、情報のみを見に来られる方やひろばを利用している方にも使いやすいように、配置を変えました。ひろばの前室として「ちびぞうひろば」もリニューアル。扉一枚でひろばとの行き来ができつつ、柱の陰があることで「ひろばから見えにくい造り」にもなっており、大きなひろばには入りにくいお子さんなどがこの場所で過ごしています。また、カフェコーナーも設置し、今後、地域の方とのコミュニティースペースとしても活用していく予定です。
・ これまで発信してきた HP や X（旧 Twitter）に加え、Instagram での情報発信も開始しました。横浜市子育て応援アプリ「パマトコ」の活用なども含め、利用者のニーズにあった形を今後も検討しながら発信を続けていきます。

④ 子育て支援のネットワークづくり

・ 都筑区を９つのエリアに分け、親子が身近な場でつながれるよう、サロンや公園遊びなどエリア独自の活動を続けています。
・ 他機関との連携も継続しており、今年度は初めて「里親のフォスタリング機関」（さくらみらい）と共催で「里親カフェ」を開催しました。また、地域のお祭り（杉山神社例大

祭等）や地域防災拠点の防災訓練にも参加をしました。

・ ネットワーク交流会では「わたしたちの街の防災を考える～子育て支援の視点から～」をテーマに横浜国立大学 稲垣先生を招き、地域防災拠点ごとにグループワークもおこないました。防災への意識が高まっているいま「平常時からの地域とのつながりの大切さを確認する機会となった」などの声があがりました。
・ 転出入の多い都筑区ならではの事業をポポラを含む区内 18 会場で実施。チルコロウィークとしてイベント週間も実施しました。区内の施設や団体（16 団体）が参加し、あいたいテナントも全面協力、イベントスペースでのイベント実施や「イオン新体操スクール」の協力も得られました。

・ つづき MY プラザ、NPO 法人 SCC と 3 団体でおこなう連携会議 TIF(Tsuzuki International Friendship）として、第 2 回 DE&I フェスティバルを開催しました。Diversity（多様性）・Equity（公平性）・Inclusion（包括性）を共通の理念とし、昨年同様に商業施設ノースポート・モールで様々な団体と連携をしてイベントを実施しました。参加者は約 4,000 人（前年比約 2 倍）、スタッフはボランティアを含め約 433 人（前年より 183 人増）の参加となりました。
・ 今年度初めて、横浜市包括連携協定として、東急不動産・東急不動産 SC マネジメント・都筑区役所と連携し、映画上映会・講演会を開催しました。イオンシネマで実施したことで、普段拠点に足を運ばない方の参加もあり、子どもの権利や子育てで大事にしていきたいことを支援者、当事者が共に時間を共有できたことはとても大きなことでした。今後も企業活動との相乗効果をはかり　ながら、引き続き連携の在り方を検討していきたいと思います。

⑤ 人材育成・活動支援

・ ボランティアグループ「ポポ☆メイト」は登録者数が 64 名（現在活動中/32 名）、新規登録は 9 名、うち 1 名は高校生です。ポポ☆メイトのみなさん自身がやりたいことなどを発案してくれる機会も増え、積極的に活動に参加をしてくださっています。
・ 利用者自身のやりたいことを実現させていく「じぶん企画」から発足した「Popola パパプロジェクト」は、父親同士がつながり・活動する場となっており、地域の方との関わりや・地域活動への参加のきっかけにもなっています。現在活動しているパパたちが、次の世代のパパたちに自身の経験を伝えたりする場面も増え、循環を生むような取組になっていると感じています。
・ 学生ボランティアと連携として、アクションポート横浜が主催する「ヤマトつながるプロジェクト」にも参加。3 年目の連携ということもあり、日頃接点のない人同士がつながり、イベント開催に向けてより“人と人とのつながりから自然と生まれる相互理解の場”になったのではないかと感じています。
・ 昨年に引き続き、短期インターン学生の受入れ（3 名）を行ない、計 10 日間インターン学生が拠点での活動をおこないました。今年度は、まんまるプレイパークと協力し、地

域の子育て支援の場を知ってもらう機会になりました。学生が活動をまとめ、ポポラ広報紙で報告紙面をつくり、ポポラスタッフ会議で報告会もおこないました。

・ 看護専門学校の実習受け入れ（計 35 名）、や、中学校の職場体験もコロナ禍以後やっと復活してきています。小中高生のボランティア活動を通して、次世代に現在の親子の状況や地域子育ての必要性を伝えています。

・ 今年度から、池辺町連合自治会の回覧板にポポラ広報紙/ポポラペーパー等を入れていただくことが実現しました。地域のお祭り等にも積極的に参加をし、地域と子育て家庭をつなぐきっかけづくりと、拠点事業の周知を広くおこなっています。

⑥ 横浜子育てサポートシステム　都筑区支部事務局

・ 令和 6 年 4 月より、横浜市地域子育て支援拠点システムが稼働したことで、これまで電話受付のみだった「入会説明会」の申込も WEB で可能となりました。横浜市 18 区の日程を一度に閲覧することもでき、時間を問わず利用者のタイミングで気軽に申込みが可能となっています。また「子サポ de あずかりお試し券」(8 時間分の無料クーポン）の電子クーポン化、「活動報告書」のシステム化なども進み、利用者だけでなく、お子さんを預かる提供会員の利便性もあがっています。また、これまで無償でおこなわれていた「事前打合せ」に対して、横浜市の給付が開始されました。

・ 利用会員数は 1,048 人となり前年比 113%となっています。それに対して提供・両方会員は 209 人と、引き続き提供会員を増やすことが課題となっています。

・ サポート内容は、利用会員宅預かりが増加しており背景には在宅ワークの増加などがあると考えています。また「きょうだい児」のサポート依頼も増えています。「子サポ de あずかりお試し券」を利用し、拠点のひろばで初めてのサポートする件数も増加しており、気軽に預かりができることで子サポの利用へのハードルが下がっていると感じています。

・ 提供・両方会員向けの周知として、都筑区役所の協力を得て「広報よこはま」への掲載や小中学校 PTA や地域の町内会掲示板などへのチラシ配架、掲示などを積極的におこないました。

・ 外国につながる親子の利用が増加しており、英語版とやさしい日本語版の資料などを作成しました。

・ 「提供・両方会員予定者研修会」では、e-ラーニングでのオンライン受講が可能となりました。これまで通り、緊急救命講習や地域における子育て支援についての講義などは対面でおこない、これから活動を始める提供・両方会員の方に丁寧に関わっています。

⑦ 横浜子育てパートナー（利用者支援事業）

・ 個別相談　336 件　　地域連携　331 件

・ 気軽に相談ができるよう、引き続き出張相談を実施。都筑区社会福祉協議会が主催した「食のお渡し会」や「都筑区子ども支援団体連絡会」にも参加。拠点には足を運べない、ひとり親家庭や貧困家庭の当事者の声を直接聞くことや、各支援団体の活動状況や運営上の課題も共有もでき、連携団体との情報共有にもつながりました。

・ 個別の相談ケースに合わせて関係機関へのつなぎも行っています。都筑区だけでなく他区の保健師や子育てパートナーと連携し親子に対応。また、他機関への訪問も積極的におこない、横浜市北部地域療育センター、児童家庭支援センターかわわ等と顔の見える関係づくりにつとめました。
・ 妊娠期からの支援として、お世話体験会やミルク作り体験会などの手技をきっかけとしたイベントを開催しました。また、男性育休講座なども開催。安心して出産・子育てができるよう、当事者同士をつなぐ取組を行いました。
・ 休日両親教室は、拠点だけでなく、地域ケアプラザでも開催し、年間 36 回の開催となりました。参加しやすい日程や場所を選択できる機会を創出することができ、地域と接点をもつきっかけづくりにもなっています。

2.　アートフォーラムあざみ野「子どもの部屋」

昨年度、「子どもの部屋」の年間保育数が、過去最低の実績だったことを受けてのプロポーザル最終年度がスタートしました。アートフォーラムあざみ野の館長が交代したこともあり、年度当初に打ち合わせの場を持ち、子どもの部屋事業（一時保育＆ひろば）の運営について協議することをお願いしました。

今までのイベント参加者のアンケート等を分析し、満足度が高かった講座の復活や、保育付き講座の増設、施設利用保育の拡大についての提案などを行いました。しかし唯一合意したのは例年実施している産後ケア事業のみ、それも交渉を重ねてようやく年２回の開催という合意ができたのみに終わりました。このままでは保育数減少に拍車がかかることが予想されたため、年度が始まった頃から、ひろば利用者や一時保育利用者に積極的に声をかけ、「はじめての保育」や施設利用で気軽に一時保育が利用できることなどを伝え、夏を超える頃には順調に保育数が伸びていきました。

しかしその状況に男女共同参画センターから呼び出しがかかり、「このまま保育数が増加すると、年度末に精算が起こり予算超過になるので、これ以上保育を増やさないことはできるか」と、年 2 回開催が決まっていた産後ケア事業についても、下期の開催は見合わせてほしいとの要望がありました。

その内容を受けて、職員のモチベーションが維持できない懸念もあり、男女共同参画推進協会として、子どもの部屋事業をどのような位置づけで考えられているのか、事業遂行した上での目標はどこに設定しているかなどの確認作業を再三行いました。「協働」という名のもと、法人としては、館の利用促進がまずは必須で、そこからジェンダーへの意識が薄い方々へのアプローチができること、特に子どもの部屋利用者については、子育てというきっかけから変化を期待できることなどを提言しましたが、協会は「子育て支援をする場ではない」との変わらぬ回答に、話し合いは常に平行線のまま、歩み寄ることなく月日だけが過ぎていくことになりました。

今年度で 5 年の契約が終了することもあり、あと 5 年、この状況が改善されないまま事業を継続する意味を見出すことができず、法人として、社会課題を受け、市民の声に近い立

場から、今必要とされている事業に転換することを決断し、男女共同参画推進協会の次期プロポーザルの結果が出た 12 月に子どもの部屋事業の継続を断念する旨の告知を行いました。その後、センターは、子どもの部屋事業を受託する事業者選定を行いましたが、事業者が決まらず、その都度継続意志の確認がありましたが、私どもの要望に対して、「協会としては変わることはない」との返事が繰り返されるばかりでした。そして年度末ぎりぎりの３月に入り、現在子どもの部屋で勤務する法人職員に個人的に残留の希望を聞きたいと許可を求められるなど、協会の姿勢そのものに大きな疑問を持つことになりました。20 年間この事業に真摯に取り組んできましたが､残念ながら 24 年度をもって終了することとなりました。

① 一時保育

・ 主催利用保育　312 人（前年度 136%)、施設利用保育 279 人（前年度 258%）
　　健康スタジオ「産後のからだケア」10 月・2 月開催　18 名参加

② 親子のひろば

ひろば de アート	18 組
オムツっこも水遊び	12 組
パパ工作 day	108 組
赤ちゃん day「Grouth ガーランド作り」	211 組
はっぴーばーす day	89 組
園庭解放 day	25 組
手遊びしましょう	56 組

3. 縁（ゆかり）ハウス

① 概要

所在地：都筑区牛久保 2－28－2（横浜市営地下鉄ブルーライン　中川駅徒歩６分）
延床面積：91.09 ㎡　築 34 年

② コンセプト

「地域ぐるみで子どもを育て共に生きる」

・世代や立場を超えたつながり
・多様さに触れ、人と違うことが当たり前の中で子育てできる環境づくり
・地域を面白がって暮らせるような取組
・地元の人と共に地元愛を育み、この街での子育てや暮らしを楽しめるような支援
・地域の各施設、大学や各種団体、商店街、農家等との連携

③ 利用状況

開所日　：　236 日

登録数　：　207 組
利用者数：　延べ 4,141 人（一日あたり 17.5 人）前年比 133%
地域別　：　中川地域 82%、中川以外 18%

④ ひろば（親子の利用促進）

・縁ハウスの利用をすすめるために各種イベントを実施しました。ひろば利用時に気軽に相談できる場であることを丁寧に伝えたこと、身近な相談相手となることでひろばの継続利用につながりました。

「ごろごろねんねの日」「お誕生日おめでとうの日」「ハンドメイドクラブ」
「ゆっくりさんの日」
「水遊び」「節分豆まき」「絵具で遊ぼう」（庭を活用した取組）
「離乳食パン講座」「赤ちゃん会」「栄養士のいる日」利用者自主企画など

⑤ ひろば（地域との関わり）

・子育て家庭が地域で安心して暮らしていくためには、人と人とのゆるやかなつながりや関わり合いが大切です。縁側が「ウチ」と「ソト」をつなぐ役割を持つことから、地域の方と親子がゆるやかにつながれるように庭に「縁側」を設置。縁側では読み聞かせを開催し、イベントの後には地域の方と親子が縁側でお茶を飲みながら交流できる環境をつくりました。

「まちなかマーケット」（中川駅前商業地区振興会）
「親子ＤＥ学食ツアー」「横浜祭」（東京都市大学）
「縁がわひろば」（地域の方によるふれあいあそび）
「ハロウィン中川まちあるき」「クリスマス会」

⑥ 子育て相談

・ひろば利用時に気軽に相談できる場であることを丁寧に伝えたことで、こどもの発達ついてなど継続した相談につながりました。
・身近な相談相手として、悩み等を気軽に話せる雰囲気をつくったことでひろばの継続利用につながりました。

⑦ 子育て情報

・地域で活動している NPO 団体等に地域情報を教えていただき、親子に提供することができました。
・地元町内会のご協力で、通信やチラシを回覧いただくことができました
・インスタグラムをはじめ、縁ハウスの事業の周知を行いました。
・地域で開催している公園あそびやおまつりなどに参加し、中川地域の「旬」な情報を届けられるよう心掛けました。

⑧ 利用者アンケート

・縁ハウスを利用して変わったこととの問いに、子ども以外の大人と話す機会が増え(76%)、子どもの成長に気づくことができた（68%）という回答が多かったです。

・縁ハウスを利用して気づいたこととの問いに、4割が中川のまちに詳しくなったと回答

・自分が関わってみたい活動として、地域の活動（自治会、子ども会、お祭り）への参加が66%と最も高かくなっています。

4. joinT ハウス

今年度、新規事業立ち上げに伴い、都筑区富士見が丘に新たに拠点を設けました。多文化共生＆多世代交流をコンセプトに、今後事業展開していきます。

●くらす事業部

① 子育てタクシー

・アサヒタクシー港北ニュータウン営業所との連携機関として、地域の子育てタクシーへの理解周知の協力、子育てタクシードライバーの現場実習の受け入れを行いました。

② 都筑区自立支援協議会

・こども部会の幹事として、地域活動ホーム、北部地域療育センター、北部学校事務所、放課後等デイサービス、児童発達支援事業所などの現状を把握し、障がいのある子と家族が都筑で安心して暮らせるような取組を続けました。

③ 一般社団法人ラシク 045

・すべての世代を通じ「22 世紀の横浜はこうあってほしい」について、元気に自由にかつ面白く議論できるネットワークを構築するために設立した「一般社団法人ラシク０４５」での活動を継続しています。他分野、多世代それぞれの現場を持つ方々が、現場を持たないネットワークの中で、「核」をあえて作らずにまだ見えぬ未来を考えていくという手法が、今まで知りえなかったひと、場との出会いにつながり、法人の事業へフィードバックすることができています。今年度の主だった活動としては、「ヨコハマ子ども子育て未来会議フォーラム」を南部、北部、市域での開催、横浜市政策局から委託されたジェンダー平等に関するワークショップの開催、保土ヶ谷区、港南区のつどいの広場、「りらのいえ」の視察などを行いました。